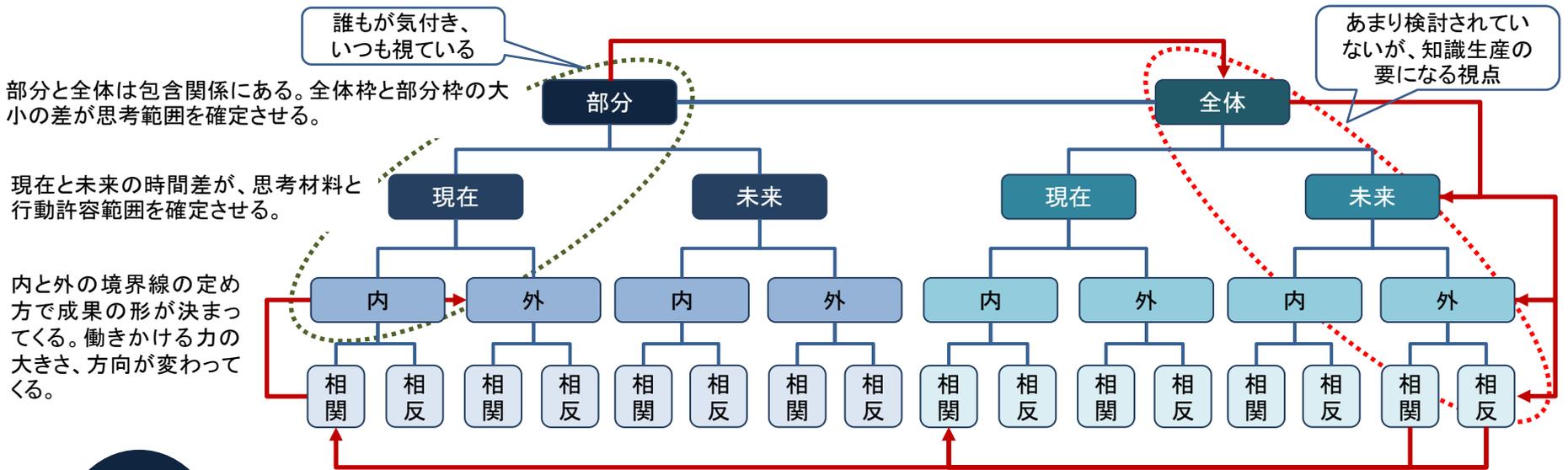


# 知識生産(展開)の視点

今を語りながら、今、明確になっている事柄を語りながら  
 如何なる「位置を考えてもらう、視てもらう位置を示す」かが、もっとも教育では大切である。  
 教師の力量が確かめられるところである。

知識の機能化は、目的とステージが明確になっている必要がある。状況認識、時間経過、関連項目等々を明らかにしていく方法を伝達する。下記に表したモデルはその一つで、「部分」に自らのテーマを記し、その全体をとらえるところから始め、すべてを埋めたところで、思考、知識体系の過不足を計る。



誰もが気付き、いつも視ている

あまり検討されていないが、知識生産の要になる視点

部分と全体は包含関係にある。全体枠と部分枠の大小の差が思考範囲を確定させる。

現在と未来の時間差が、思考材料と行動許容範囲を確定させる。

内と外の境界線の定め方で成果の形が決まってくる。働きかける力の大きさ、方向が変わってくる。



**現在** 現在としてとらえる時間帯を確定させる。1週間か、1ヶ月か、1年か。

**未来** 未来の終点をとらえる年数が、リスクと変化を考慮させる。短すぎても、長すぎても問題である。取り扱う知識、科学によって最適期間がある。

**内** 内と外の境界は、考える方向で、想像以上に厚い。内向き(自身にとって、組織にとって)と外向きに考えるのでは、結果はまったく異なってくる。

比較検証していくライン

《相関と相反》  
 相関と相反は、一つずつとは限らない。複数の相関があり、相反がある。並列で挙げられた相関のなかにも、相反関係を作る場合がある。意味の取り扱い方で変わる。